

## 私たちの死と復活

主任司祭 高木 健次

今年も教会は聖週間の典礼で主の死と復活を記念します。この行事を昔の出来事を表現するだけと考えるならもったいない気がします。そうではなく、主の死と復活という出来事にこめられた象徴的な意味をくみ取って、自分の今の状況にあてはめ、生き方や考え方を見直してみることが大切なのではないでしょうか。

ここで、聖週間の典礼でよく出てくることになるいくつかの言葉の象徴的な意味を考えてみたいと思います。まずは罪と死です。罪も死も私たちが生きている現実で体験する苦しみを表しています。大雑把な言い方をすれば、罪は自分の責任で引き起こしている苦しみで、自分に責任がなくても降りかかってくる苦しみの総称と言えます。ところが「死ぬ」と動詞となると違う意味が加わるようです。罪に死ぬ、古い自分に死ぬ、などと使われます。一見すると縁を切るという意味かと思いますが、イエス様が死なれたのは私たちを贖うため、つまりご自分に属する者とするためだったと教会はくりかえし強調しています。そこで、何かに死ぬとは、

それを完全に引き受けるという意味が込められていると言えます。そして「復活」。それは立ち上がるということです。復活したイエスはすべてを支配する主です。状況に支配され、被害者として横たわっているのではなく、自分のものとして状況を担い、自分の足で歩むこと。それが復活だと言えるでしょう。

イエス様は私たちをご自分と共に復活するようにと招かれます。そのためには、私たちがまづ、イエス様と共に死ななければなりません。それは、罪に死ぬこと、すなわち自分のせいではないと言いつけるのではなく、自分の過ちを認め、過ちを犯してしまう弱い自分を直視して、引き受けようとするのであり、死に対しては、なんで自分がこんな苦勞をしなければならぬのか、誰のせいなのかと言いつけることをやめ、苦難を引き受ける覚悟をする、その状況で自分がどうするかに焦点をあてることです。その時に、わたしたちも主と共に復活し、自分の人生を、今置かれている状況を本当の意味で生きることができるよう。